

特集

ナースにしかできない!
臨床栄養管理

栄養管理は、もはや医師や栄養士、NST ナースのみの仕事ではありません。今、NST (Nutrition support team) 活動に熱い視線が注がれています。2006 年の診療報酬改定では、栄養管理加算も導入されました。褥瘡、感染症、低栄養状態、術後縫合不全をはじめ、臨床でしばしば直面する「病態」において、栄養管理が絶大な効果を発揮することが認められた結果と言えるでしょう。その臨床において、患者の最も近くでアセスメント&ケアのできる臨床ナースに大きな期待が寄せられています。本特集では、臨床栄養管理における一般ナースの役割を明確にしてその基本知識を概説します。栄養管理における役割意識とモチベーションが高まります。

臨床栄養管理におけるナースの役割 矢吹浩子

コラム・こうして NST を立ち上げた 矢吹浩子

医師はあなたに期待している!

臨床栄養管理はナース主体でなければならない 小坂正

ナースにしかできない! 臨床栄養管理のポイント 小谷穂治

囲み記事・ナースにしかできない! 摂食嚥下訓練 宮本純子

コラム・こんな勉強会をやっています 荒木一恵

一般ナース酸化型!! 誌上 NST カンファレンス×2 事例

兵庫医科大学病院 NST チーム

コラム・NST カンファレンスに参加して 余谷直美

招待席

フィクションの楽しみ

海堂 尊さん

連載

from KOBE 「後輩」を育てる総合実習・5

——岩本亜衣子・定兼有美・高田早苗

患者になった旧友との往復書簡

「前略 小生、透析を始めました。」・5 ——中村厚・東めぐみ

明るい肉体・10 ——天田城介

看護に役立つ! 人体の神秘の世界へご招待

からだと病気とミクロのはなし・11 ——佐藤雄一

看護のアートをめぐるカフェ・トーク・11 ——谷津裕子

周手術期の臨床看護判断を磨く 手術侵襲と生体反応から看護援助を

組み立てる・11 ——深田順子・鎌倉やよい

アフリカが紡ぐ命の物語・2 ——井上冬彦

悩めることも才能だ! 宮子あずさのお悩み外来・14 ——宮子あずさ

看護学雑誌 第71巻第1号 2007年1月1日発行(毎月1回発行)

発行/株式会社医学書院 代表者 金原優

〒113-8719 東京都文京区本郷5-24-3

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 2007, Printed in Japan

1部定価 1,260円(本体1,200円+税5%) 年ごめ予約購読料 13,200円(税込、送料弊社負担)

・定期購読のお申し込み先/(株)医学書院販売部 TEL 03-3817-5659

・第69巻以前のバックナンバーのご注文先/(株)東亜ブック TEL 03-3985-4701

[看護学雑誌]編集室(担当/鶴淵・大野・小田嶋) TEL 03-3817-5772

E-mail kangaku@igaku-shoin.co.jp 医学書院ホームページ <http://www.igaku-shoin.co.jp>

本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権(送信可能化権を含む)は(株)医学書院が保有します。

JCLS <(株)日本著作出版権管理システム委託出版物>

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(株)日本著作出版権管理システム(TEL 03-3817-5670, FAX 03-3815-8199)の許諾を得てください。本誌掲載論文・記事のタイトル頁最下段に記された「0386-9830/07/¥250/論文JCLS」は、1論文1回複写につき250円を要することを明示したものです。これは表示のない論文等にも適用されます。JCLSへのご連絡の際には、筆頭著者名・論文名と併せて本表示をご掲示くださるようお願いいたします。

編集後記

●2007年を皮切りに、団塊の世代が続々と定年退職を迎えるという“2007年問題”。労働力不足や豊かな経験に裏打ちされた知恵・技術の断絶が懸念されるといい、不安を覚えます。これまでのお仕事に心からの敬意をはらい、バトンを受け取らなければと思う一方、60歳という年齢での完全な引退を惜しまずにはられません。スポーツクラブなどでは若者顔負けで体を動かす方も見かけますよね。ナースの場合はどうでしょう。力仕事もこなす仕事柄、体を痛めて続けたくても続けられない、という声も聞きます。でも、徐々にナースの負担を減らせる身体・道具の開発もされつつあります。経験も大切な要素となる看護。長く続けやすい仕事になればいいな、と思います。【鶴淵】

●「日本語も英語も話せない患者さんがやって来た」「民間療法を同病室の人に勧めたが患者さんがいる」「実習生が学校で習ったやり方しかしない」「患者と家族の判断が対立している」「新人が漢字の読み書きができない」などなど。今回の特集に取り上げられなかった“危機”は、まだまだたくさんあります。どの職場でも同じですが、ナースも“仕事”のことだけを考えているわけにはいかなんと言えらるでしょう。

今回取り上げたのも取り上げられなかったのも、実は今年の特集で取り上げるテーマとなりそうなのです。弊誌では、ナースの身近な問題を見逃すことなく追いかけていくことにしています。皆さんも、ぜひ一緒に“危機”の解決法を考えてみてください。【大野】

●鷺田清一先生(大阪大)の講演を聴く。老いが“問題”として論じられることの異様さをテーマに、介護することとは本来当たり前課題であること、課題とは取り組むこと・向き合うもの、成長主義(若さ愛する社会)がもたらした社会が老いの文化・表現・語りの欠けた「空白」というアイロニーを生み出している、という。前衛華道家・中川幸夫の話が印象的だった。満開か直前を生けるのは花の命の一部。枯れ、腐ってくる、真っ赤な花の汁が「血」となって流れはじめる。「この花はまだ死んでないといってる」という声だ。花の最後を見届ける華道を始めた中川の花との関係に、ケアということが見出される。【小田嶋】